ウィズコロナ時代の中小企業経営

歴史に学ぶ

第二十六回 築城の名人・藤堂高虎は七君に仕えた究極のナンバー2

大阪経済大学特別招聘教授・
経済評論家
岡田 晃

羽柴秀長の下で才能開花

徳川家康のナンバー2と言えば、誰の名が思い浮かぶだろうか。徳川四天王の酒井忠次、本多忠勝、榊原康政、井伊直政のいずれか、あるいは家康の晩年まで側近として仕えた本多正信か？

だがここではあえて藤堂高虎の名を挙げたい。次々と主君を変えたことから「世渡り上手」とのイメージを持つ人も多く、家康にとっては外様だ。そんな高虎がなぜナンバー2と言えるのだろうか。

高虎は一五五六年に近江国の土豪の家に生まれた。幼い頃から人並外れた体格で、気性も荒かったという。十二・三歳の頃、近隣の家に押し入った賊を討ち取ったという逸話も残されている。

一五七〇年、十五歳で近江の浅井長政に仕えたが、間もなく同僚と喧嘩して殺め、浅井家を逃亡する。その後、浅井氏旧臣で羽柴秀吉麾下に転じていた阿閉貞征（あつじさだゆき）に仕えたが、またもや同僚を殺害。続いてやはり浅井氏旧臣で織田信長に臣従していた磯野員昌（かずまさ）、次いで信長の甥・信澄の家臣になったものの長続きしなかった。軍功を挙げたのに八十石のまま加増がないことが不満だったという。

この時、まだ十九歳だが、仕えた主人はすでに四人。高虎の若い頃の史料は少ないため不明な点も多いが、やや問題児という印象だ。

だが一五七六年、二十一歳の時に秀吉の弟・秀長に三百石で召し抱えられたことが、彼の運命を切り開くことになる。秀長は兄・秀吉を助けて但馬や播磨、鳥取などに相次いで出陣したが、高虎はそのたびに最前線で戦い軍功を挙げた。石高も順調に増え、数年後には三千三百石となった。

本能寺の変（一五八二年）の三年後、紀州を平定した秀長により和歌山城築城の普請奉行に任命された。この頃から築城で才能を発揮し始め、生涯で二十八の城を築いたとされる。自らの居城として宇和島城、今治城などのほか、関ケ原の戦い後は家康の命で江戸城、伊賀上野城をはじめ数多くの築城に携わった。

江戸城など二十八の築城に携わる
～家康の絶大な信頼を得る

この間、秀長時代に二万石に加増され、秀吉時代に八万石、そして関ケ原の戦いでは家康の東軍につき、その戦功で二十万石に、さらに江戸城修築や大坂の陣の功績などで最終的には約三十二万石となった。

この経過を見ると、家康からの評価が特に高かったことがわかる。とりわけ注目されるのが、徳川にとって重要な築城を次々に任されたことだ。

まず江戸城。家康は江戸城に入った一五九〇年以降、一部修築を始めていたが、一六〇三年に征夷大将軍に任ぜられたのをうけて、一六〇六年から全面リニューアルに着手した。

家康のねらいは、徳川の天下になったことを目に見える形で示し、全ての大名と大坂の豊臣氏を圧倒することだった。そのために工事は「天下普請」とした。外様大名を動員して工事に当たら

せ、資材調達や人員面も含めて費用は大名に負担させるというもので、工事を通じて出来栄えと忠誠心を競わせる効果もねらっていた。

家康はその縄張り（設計）を高虎に命じたのである。高虎はそうした家康の意を汲んで、城郭を拡大し、巨大な石を積み上げた石垣で城を囲むとともに、石垣と櫓を備えた枡形門を幾重にも張り巡らすなど防衛力を飛躍的に高めた。

天守閣は五層五階（地下も含め六階）の構造で、高さは約四十八メートル、天守台も含め六十九メートルとした。これは当時の大坂城の約四十メートルをはるかにしのぐ日本一だ（ただ設計図は残っていないため高さなどは異説もある）。

ここでよく考えると、高虎が家康に近づいたのは朝鮮出兵から帰還した一五九八年以降のことと思われ、わずか数年しか経っていない。にもかかわらず家康は、政治的にも軍事的にも最重要な、いわば社運を賭けた大プロジェクト＝江戸城築城の縄張りという大仕事を高虎に任せたのである。

さらに家康は豊臣包囲網として、二条城（新築）、伏見城（再建）、篠山城（新築）、丹波亀山城（修築）、伊賀上野城（修築）の天下普請を矢継ぎ早に命じ、これらの縄張りも高虎に行わせた。

このうち伊賀上野城は、大坂城のある西向きの石垣の高さが二十六メートル（水面下五メートルを含む）で、これも当時の大坂城を上回る日本一の高さだ。水深五メートルという深い堀からこれだけの高石垣を立ち上げるのは並大抵のことではない。高虎の築城技術がいかに優れていたかを物語っている。

伊賀上野城は高虎自身の居城でもあった。それまで城主を務めていた今治から移り、来るべき豊臣との決戦で最前線になるかもしれないこの地の守りを固めたのだった。

「オンリーワン」の存在になる！

築城以外にも、家康の高虎への信頼ぶりを示す逸話が数多く残っている。

家康は一六〇五年に将軍職を秀忠に譲って駿府に移り住み、大御所の居城として駿府城を修築した（一六〇七年）。この時、大手門の真正面のひときわ広い屋敷地を高虎に与えている。高虎はたびたび駿府を訪れて家康と面会し、家康も高虎のこの屋敷を訪問したという。

一六一六年、病状が悪化した家康は「徳川に敵対する輩あれば、高虎を第一陣に、井伊直孝（直政の次男）を第二陣にせよ」と遺言したと伝えられている。それを守ってか、藤堂家は幕末まで転封がなかった（井伊家も同じ）。家康の死の直前に高虎は枕元に呼ばれ、最後の言葉を交わしたという。これは外様大名では唯一だったとされている。

なぜ高虎はここまで家康に信頼されたのだろうか。その最大の要因は何といっても優れた築城技術だ。築城技術は当時では最強最先端のキーテクノロジーであり、しかもその技術内容は築城を重ねるごとに進歩していた。この分野で高虎は「余人をもって代えがたい」、つまり「オンリーワン」の存在となって家康を支えたのである。これこそが、まさに究極のナンバー2と言える理由だ。

家康はいわばスカウトで高虎を得たわけだが、今日の企業で言えば、このようなナンバー2がいればトップは心強い。スカウトであれ内部登用であれ、信頼できるナンバー2を持つ、あるいは育てることは、トップの責務でもある。

一方、ビジネスパーソンにとっては、自分の得意分野や強みを磨くことが、企業の中でも外でも通用する「武器」になることを、高虎は教えてくれている。

岡田 晃（おかだ あきら）

一九七一年、慶応義塾大学経済学部卒業後、日本経済新聞社入社。編集委員を経て、テレビ東京出向。「ワールドビジネスサテライト（WBS）」マーケットキャスター、同プロデューサー、NY支局長、テレビ東京アメリカ社長、理事・解説委員長。二〇〇六年から大阪経済大学客員教授。